

ハッハは似合わないのか、  
「は鳴りが今心とつ」とい  
「リヤ」(アンタルシア幻想  
曲)では「さうさう」狭い首輪に密  
集する音も素早い分散和音もすべて  
の音がピンと立ち上がり、グリッサ  
ンドは迫力をもつてつらなり、浮き立  
つリズムを刻みながら熱い音楽が紡  
がれたのだ。後半のリスト3曲も彼  
のピアノニズムにあっては楽器が存  
分に鳴った。「エステ荘の噴水」で  
は水しぶきの中に旋律が明瞭に息づ  
き、「ラ・カンパネツ」では身体的  
敏捷性と音楽表現が見事に結びつ  
き、「スペイン狂詩曲」では技巧の極  
致をみせながら、舞曲の愉快感もと  
ころん表現されたのである。その陽  
性のテンパ・ラメントこそ彼の財産  
だ。(12月24日・津田ホール)

### ◆ 秋谷由喜子

**ミハイル・ヴォスコレンスキー**  
モスクワ音楽院教授で数多くの弟  
子を育て上げているヴォスコレン  
スキーのリサイタル。プログラムは  
ベートーヴェンの最後のソナタ  
「第30、31、32番」。眼前に楽譜を置  
かれたように、あくまで明快で理知  
的なアプローチだ。真摯で自然な音  
楽の流れは、ベートーヴェン晩年の  
境地を慮って比喩がない。気負いは  
微塵もなく、穏やかに、複雑に絡み  
合う外声と内声の調和が精神的な高  
みと無垢な歌を創造する。そのピアノ  
ニズムは、内省の淵を覗くような流  
滞、たおやかな崇高美とともに、ベ  
ートーヴェンの歩んできた人生の苦  
悩や喜び、そして諦観を鮮やかに映  
し出す。とりわけ緩徐楽章は絶品だ。  
「30番」の第3楽章では旋律線と和  
声が千紫万紅の彩りを移ろわせなが  
ら見事な表情を創出し、「31番」第  
3楽章では端整でありながら心の琴  
線に強く訴求するよらかな心情を吐  
露、絶妙なフーガへと入っていく。

そして「32番」第2楽章では、晩年  
の変奏様式を巧みに扱い、ベートー  
ヴェンの根本的な創作理念を鮮やか  
に再現した。(12月7日・東京文化会  
館(小))  
▲真嶋雄大

### ◆ 宮谷理香

宮谷はショパン・コンクール入賞  
の翌年にデビュー、今年15周年を迎  
えた。10年にわたってショパンを主  
軸としたリサイタル・シリーズを展  
開してきたが、新しい境地を目指し  
ての飛躍である。その彼女が選んだ  
テーマは「Fantaisie」。そのコン  
セプトによるプログラムは、ベリオ  
ウ、ベートーヴェン「ソナタ(月光)」、  
ベルク「ソナタ」、バッハ「フ  
グーナ(ジャコニス)、ブラームス  
「間奏曲」Op.118 No.2、ショパン  
「幻想曲」Op.111、そしてリストの  
「ソナタ」Op.10 No.3、第1番「村の居  
酒屋での清り」。冒頭のベリオは玲  
瓏にして清冽、聴衆の意識を集中さ  
せるには極めて効果的であり、続く  
「月光」への導入以上の説得力。「月  
光」第1楽章は、ソイメの詩に啓発  
された死者への嘆き、すなわち「ド  
ン・シヴァン」の騎士長の死を  
標榜するかの如き旋律の符号音符に  
引きずるような重さを与え、吊鐘と  
したの鮮やか、続くベルクは、研  
ぎ澄まされた音色が鋭敏な感覚で、  
楽想呈示からの変容が独特の表象と  
ともに語られたが、構築がしっかり  
し過ぎて耽美とまでは至らなかった  
のはやや残念。一方、深々とした共  
感そのまま結果された「幻想曲」  
「ネーズ」の純度の高さは比喩なく、  
「フグーナ」の闊達な躍動は生命  
力に溢れる感興を創出。(12月9日・  
東京文化会館(小))  
▲真嶋雄大

### ◆ セルゲイ・シエフキン

07年にバッハ「ゴルトベルク変奏

曲)で初来日、高い評価を得たシエ  
フキンは、以降も「平均律クラヴィ  
ーア曲集第2巻」全曲演奏などで耳  
目を集めてきた。今回はバッハ「ゴ  
ルトベルク」の日本再演。まずブラ  
ームス「6つの小品」も堅実なロジ  
ックと真摯な対峙、またブラームス  
特有の抒情を紡いで見事な表情を織  
り上げたが、秀逸なのはやはり後半  
の「ゴルトベルク変奏曲」。冒頭の  
ピアノから、その磨き抜かれた音の透  
明さ、美しさに圧倒される。端止な  
歩みで粒立ちも良く、伝統的手法の  
中で弾き進めるが、リビートでは一  
瞬、華麗な装飾をちりばめて輝かし  
い雅趣を描く。11小節目の木短調の  
和音も、最初は上行、リビートでは  
下行するアルペジオを用い、また  
第1変奏曲のリビート部分では大胆  
にテンポを落とす場面もあってた  
と、けつて奇を衒って面白いわけ  
はなく、全曲が統一されたミクロコ  
スモスの中で爽々と展開していくの  
は驚愕ですらある。2段鍵盤チェン  
バロのための作品であるから、ピアノ  
で演奏するにはかなり無理な場面  
もあるが、ほとんどドン・ペダルで  
はないかと思わせるような強弱のベキ  
テクニクと、緊張が張り詰めるよ  
うな集中力の中で、耽美的で玲瓏な  
「ゴルトベルク」を築き上げた。(12  
月22日・すみだトリフォニーホール)

### ◆ エフゲーニー・ザラフィヤンツ

ザラフィヤンツは59年ロシア生まれ  
れ、93年のボコリッチ国際コンク  
ールで第2位を受賞。現在は、クロ  
アチアに居を構え、06年からザラ  
フィヤンツ音楽院で教鞭をとる。この  
リサイタルでは、リストを軸にロマ  
ン派の作品で構成された。旋律線を  
たつぷりと歌い上げ、音の色遣いや  
響きの遠近感、そして速度に至るま  
で極めて細やかに設定し、会場を庄

倒的なファンタジーに包み込む。感  
情を飛躍させるのではなく、まろ  
みを含んだシューマン「蝶々」、続く  
「森の情景」において、さらに夢の奥  
深くへ聴く者を誘う。リスト「ソ  
ナタ」では、壮大なスケールで音楽  
を捉え、彼自身の客観的でスタイッ  
クなスタンスは、作品の崇高さを引  
き出すのに大いに貢献していた。そ  
の他「ショパン」ポロネーズ第6、7  
番。深い洞察を経たザラフィヤン  
ツ独特の濃密なロマンス・シズムを  
存分に堪能できた一夜であった。  
(12月12日・東京文化会館(小))  
▲道下京子

### ◆ 野原みどり

日本の女性ピアニストの中でも  
ひととき安定した実力を誇る野原み  
どり。このリサイタルはリスト生誕  
200年を記念して、すべてリスト  
作品で組まれた。曲目は「巡礼」の年  
第3年、「絶境技巧協奏曲」第1番  
「ソナタ」短調。このリサイタル  
でも、極めて完成度の高い演奏を示  
した。音の粒立ちはこの上なく美し  
く、音楽の隅々まで耳に届く。抜群  
の指の抑制を通して、透明感溢れる  
音色と壮大なスケールは、圧倒的で  
あった。リストの音の物語を敢えて  
強調して描き上げるのではなく、音  
楽の流れを形成する中で、ストーリ  
ーを自然に引き出していた。「巡礼  
」の年第3年」において、野原は高音  
の煌びやかな響きを抑え、沈むよう  
な重く低音とともに虚無的な世界を  
静かに繰る。「ソナタ」では、速度  
に大きな緩急をつけつつ、丹念に音  
を重ね合わせてゆく。作曲家への畏  
敬の念を感じさせる演奏であった。  
(12月14日・浜離宮朝日ホール)  
▲道下京子

### ◆ ロヴロ・ポコリッチ

ザグレブの大学などで後進の指導  
にもあたるロヴロ・ポコリッチは  
70年生まれ。同姓のイヴォオは兄で  
あるが、2人の演奏のタイプはかな  
り異なっている。当夜はリスト「巡  
礼」の年第1年」より「オールドマン  
」の谷、「バラード」第2番、「伝説」  
より「波を渡るパオラの聖フランシ  
スコ」エスコー、トルゲスキー「展覧会  
の絵」というプログラム。大柄な身  
体から繰り出される迫力ある強音  
もさることながら、筆者には「リク  
」トな表現が心に残った。リストの  
作品では、音の濁りがやや気になっ  
たものの、深みを帯びた響きと美し  
い叙情性は作品を雄弁に語ってい  
た。「バラード」では、半音階の運動  
の多彩さの反面、弱奏の美しさを際  
立たせ、この画期的で大きなコント  
ラストが作品に漲る生氣をもたら  
す。後半の「展覧会の絵」でも、細  
密な面を見るような繊細さが色彩感  
を高めていた。曲の一つ一つにも情景  
描写をしっかりと刻み、堅固に音楽  
を築き上げてゆく。「アンコール」の  
「ロマノフヤリスト」「灰色の雲」が  
聴けたのも大きな収穫であった。  
(12月15日・東京文化会館(小))  
▲道下京子

### ◆ オレフ・音楽

松平朝則の没後10年を記念し、影  
響を与えたシェーンベルクとを組み  
合わせた一夜。奈良ゆみみの喉は冒頭  
から好調で、モノオレフ「源氏物語」  
の「離月夜」では力強い響きが  
徐々にしなやかさを帯び、幽玄の境  
地へと誘う。続いて「月に憑かれた  
じい」をE・シユタインのピアノ  
版(寺島陸也の繊細な音作りを絶賛)  
で披露し、高音域の玲瓏なる響きで  
場内を圧倒。後半では松平の遺作